

## 熊本県におけるアズキの生産事情について

坂井定義・堀内信夫・世戸口信雄・工藤洋男

(熊本県農業試験場)

SAKAI, Y. HORIUCHI, N. SETOGUCHI, N. KUDOU, N.

Circumstances of Azuki-beans production in Kumamoto Prefecture.

我国におけるアズキ生産の大半は北海道で、最近しばしば冷害のため減収し、また各県においても商品生産が逐次自給的生産に変わりつつあり、総体的には減産の傾向である。そうした一般的傾向の中で、近年熊本県の菊池台地、益城台地を中心とする平坦畑作地域にアズキの作付が年々増加し、5000ha以上の主要畑作目になってきている。元来熊本県は肥後アズキの産地として知られており、昭和初期には5000ha以上あったが、戦時中は減少の一途をたどり、昭和22年には1100haまで減少した。その後、食糧の生産が軌道にのりにしたがい漸次栽培面積も増加し、昭和32年には5400haとなり、価格の変動により多少の増減はみられるが、近年5000ha程度で安定してきた。しかも自給的性格の生産地である、阿蘇、球磨の中山間高冷畑作地域や、天草の海岸島岐畑作地域では減収の傾向にある反面、畑生産性が高く、商品化率の高い菊池および益城台地の平坦畑作地域に集中して増産されつつあって、おのずから生産地帯が形成されてきた。今後はこの地域が本県の夏アズキの主産地となり、また秋アズキは高冷山東部の畑作率の高い一部に、わずかに栽培されることになると考えられる。

しかし、反当収量は90kg程度で、昭和初期よりほとんど増加がみられず、年次間の変動も著しい。また夏、秋アズキの分布は大豆と同様に考えられ、品種の分化、栽培の変化は少ない。夏アズキは麦間に播種され、さらにアズキの間作として陸稲、甘しよ、ソバ、アワなどが作付される一年三毛の栽培様式が多い。このように夏アズキは輪作体系の中で補合的作物として位置づけられているため、前後作によって畑地の利用率が制約され、初期および後期の生育が阻害されるので、アズキの単位面積当りの収

量をもつめるには極めて不利な条件下で栽培されている。しかし畑地の単位面積当りの総合収益を高めるためには、極めて合目的な輪作体系であると考えられる。一方中山間高冷地および山麓地域は、主として秋アズキの単作栽培が主体であるが、土地生産性が低く、栽培技術に後進性がみられ、粗放経営であるために単位面積当りの収量は低い。また山麓地帯は自給的小面積栽培であるため、栽培技術改善の意欲がないことも低収の要因である。

しかしながら、近年価格の高騰により、単位面積当り粗収益は大巾に高くなっている。

また栽培方法を見ると、肥料農薬の投入は少なく、一般に粗放的な栽培管理であり、脱穀調整は豆類に汎用性のある動力脱粒機が導入されたため、その労力は半減されたので、一農家当りの作付面積は拡大されつつある。このように、アズキは畑作経営における補合的な作物とはいいいながらも、現在では、他の主要畑作物に比べて収益性においておとらない作物目である。

アズキは生育期間が短く、間作による害は少ないとされ、輪作体系の中に組み入れやすく、危険分散がはかれるので、総合収益上からも有利ではあるが、収量は戦前の域を脱し得ず、旧態依然の品種および栽培法なので、改善すべき点が多く残されている。そのため、まず収量をもつめる必要があるが、耕種的には夏アズキの性格が輪作体系の一環として補合的作物であるため、多くの困難が予想される。したがって品種の面より生産の向上を計るべきである。なお流通部門については共販体制を押し進め、作柄の良否による年次価格の変動を是正し、価格の安定を計る必要がある。